

四国あるき遍路の旅



平成24年11月16日（金）～18日（日）

目次：	頁
四十四番大宝寺	4～
四十五番岩屋寺	8～
四十六番浄瑠璃寺	11～
四十七番八坂寺	12～
四十八番西林寺	14
四十九番浄土寺	14
五十番繁多寺	15
五十一番石手寺	16～

道後まで、峠は四ヶ所。

内子から久万高原、そして松山に向けて一気に下っていきます。

今回の遍路での最高到達地点の標高は、807m。最低地点が36mなので、標高差771m。理科で習った高度と温度の関係からすると、100m高くなるごとに気温は0.6度下がるので、 $0.6 \times 7.7 = 4.62$ 度の気温差があることとなります。そこで、44番大宝寺と45番岩屋寺がある町は、久万町から久万高原町と改名し、松山の避暑地的な場所となっているようです。といっても、私たちが歩いたこの時期、避暑地ではなく、初日には日陰に雪を見たり、2日目は雨が降り続いて、寒冷地といったところでしたが・・・。

内子から下板場峠越え

バスがない！

前回最後の内子から四十四番大宝寺までの遍路道は、畑峠・農祖峠越え、そして私たちが歩いた下板場峠・鴉田峠越えという遍路道があり、どちらも内子から35～36kmの距離があります。「内子から歩いて途中で一泊し、2日目に峠越え」という旅程も考えたのですが、少し先を急ぐことにして、初日に峠越えすることにしました。

とはいえ、内子からおおよそ25kmも山あいに行く公共交通機関を探すのは至難の業。インターネットを駆使してもどうかと思われましたが、奇跡的に内子町営バスを見つけました。といっても、下板場峠の麓までの直通はなく、途中で乗り換えての路線バスでした。これで、初日の峠越えが可能になりました。

何回も旅程を練るたびに、最新情報を入手していくわけですが、あるとき愕然としました。それは、内子町営バスの乗車予定路線が去年で廃止になったことでした。乗り換え地点までは定期運転しているものの、その先はどうし

ようもありません。乗り換え予定だった分岐地点で降りて、その先タクシーにしようかとも思いましたが、そんなところまでタクシーに来てもらうのは申し訳ないと思ひ、いたしかたなく内子駅からタクシーに分乗してということになってしまいました。

足の心配がなくなりましたが、次は昼食の心配、と心配は尽きません。タクシーを予約するついでに、内子駅まで弁当を持って来てくれるお弁当屋さんはないだろうか、と聞くと、うちで手配してあげましょうとのお言葉。「捨てる神あれば、拾う神あり。」これで昼食の準備もできたのでした。

そんなわけで、私はみなさんより余計おいしさを味わって、お弁当をいただいた次第です。



【上】下板場峠への登り始めはまだ舗装道路です。【下】舗装道路が尽きたところから、いよいよ山中の遍路道となります。



今回最初の峠、下板場峠がどれぐらいきついか不安だったのでしょ。峠を降りたら、皆一安心の笑顔です。でも、ここは足慣らし。下板場峠までは高度差150～160mの登りでしたが、次の鴉田峠へは一旦下って、標高800m近くまで約280mの登りとなるのですから・・・。



下板場峠を下りて、宮成（みやなる）の分岐点に大師堂があることになっていましたが、大師堂は見つからず、「葛城神社」の参道をお借りしてお昼ご飯にしました。こんなこと、天気がいいからできるので、お弁当の美味しさと天気の良さを味わいました。

看板に偽りあり

葛城神社でお弁当を食べている時、はるか正面の山には雪が見えました。数日前の里の雨が、山では雪だったそうです。

由良野の分岐【右上の写真】を過ぎると、いよいよ鴫田峠への登りとなります。

鴫田峠は、「ひわだとうげ」と読むのだそうですが、「鴫」は普通トキと読んで、東金市の地名の由来、鴫根（ときがね）とか鴫ヶ峰（ときがみね）に使われています。日本で絶滅したトキが、千葉県でも飛び交っていたことを想像させてくれるのですが、そこで、てっきり「ときたとうげ」だと思っていました。

弘法大師が大洲から歩いて来る間ずっと雨続きで、この峠に来てようやく晴れて、「日和だ」と言ったのが訛って「鴫田」（ひわだ）と

なると案内板に書いてありました。

ちょっと待った！歩いている皆さんならお気づきでしょう。私たちでさえ、大洲から内子まで一日もかかりませんでした。ということは、現代人より健脚の古人だったら、大洲から鴫田峠まではせいぜい一日半です。それを「ずっと雨続き」だったとは言わないはずです。

字に偽りありとは言えませんが、歩き遍路しているものには、「看板に偽りあり。」と見抜けるのです。



【上】紅葉の下を鴫田峠に向かう。

【左上】鴫田峠に着いて、雄たけびをあげる。失礼、一人は雄たけびではありません。

【左下】遍路の仲間いつの間にか、傷痕軍人がいました。白装束に杖、右腕を首から吊って・・・えっ、「塩じい」ではありませんか？途中でこけたのだそうです。せっかく満願を迎えるのだから、気を付けてくださいヨ。

【左】鴫田峠に向かう遍路道にあった道しるべ。「菅生山ヨリ二名村竹口江一里」

菅生山は大宝寺の山号で、大宝寺から二名村（にみょうむら）竹口へ一里であると教えてくれます。鴫田峠は、大宝寺がある久万町と二名村（にみょうむら）を結ぶ街道の峠で、昭和30年ころまで茶店があったのだそうです。

宿坊に事情あり

鵜田峠を下ると久万高原の街が眼前に広がります。四十四番大宝寺は、この町の山裾にあります。今晚の宿は、ここの宿坊です。

以前、足摺の金剛福寺宿坊でもあったのですが、予約の際に一回断られたのです。11月16日に一泊したいのですが、と言うと、その日はやっていないとのことでした。とりあえず2日目のへんろ宿を予約してと思い、電話で予約をしました。最後に、大宝寺さんの宿坊で断られたのですが、どこか久万高原で泊まれる所はありませんかと尋ねると、宿坊はやっているはずですよ、というのです。

気を取り直して再び大宝寺さんに電話。16日に宿泊をお願いして断られたのですが、19名の団体が泊る所がなくて困っているのですが、どこかないでしょうか。すると、それだったら泊れます。???まあ、疑問符はどうあれ、無事泊らせていただけることになった次第です。

翌朝、朝のお勤めのあとのご住職のお話で、伊予の宿坊も閉じてしまうところが多くて、残りわずかですが、うちはやめませんが、またお越してくださいとのことでした。次回、予約の電話をしたときには、断らないでいただきたいと願っています。



【上】久万川に架かる橋を渡ると、大宝寺の総門。周りは民家ですが、この先深い森の中に大宝寺があります。

【右】大宝寺の山門。大きなわらじが奉納されていました。バスやタクシーのお通路さんは、ここをくぐらないのだろうなあ。

【下】石仏前に置いてあるお賽銭入れには、秋がたくさん供えられていました。よだけ掛けだけでは寒そうです。





大宝寺宿坊の朝食です。

あきらめもつく

夕食の時、塩月さんは三角巾を余儀なくされ、さぞ不自由だろうと思いましたが、「大丈夫。左手は使えるから、酒は飲める！」と、怪我をしても飲むことはあきらめないようでした。

翌朝、6時から朝のお勤め、朝食を済ませ、7時半出立。こう書けば何事もない遍路の朝ですが、外は天気予報通りの雨。それも本降りに近い降り方。小雨で、空が少し明るいなんていうと、雨具をどうしようとか、リュックにカバーを付けようとか、悩む悩む。出発ぎりぎりまで迷ってばかり。でも、この日の朝は誰も迷う

ことなく雨支度をせざるを得ません。こうなれば、あきらめもつくわけです。

なにも雨に限ったことではありません。親がもうちょっと良い頭に生んでくれたらとか、足がもう少し長かったらなんて・・・。でも、顔も頭も足の長さも、どうしようもないとあきらめてきたではありませんか。

雨が降ったらカッパ、冬は寒い、足を出さなければ札所に着かない、分かり切ったことを受けいて行くことがあきらめ（明らめ）もつくというのでしょうか。

よーし、今日も歩くぞ！

大宝寺客殿の前で、出立の姿で集合。とてもお遍路さんには見えません。



槇の谷經由遍路道



四十五番岩屋寺に向かう槇の谷遍路道を目指して歩く。

遍路道の盛衰

大宝寺から四十五番岩屋寺への遍路道は、畑野川経由の八丁坂を登るルートが主なルートです。距離も一番近いと思われます。しかし、一巡目で、岩屋寺から大宝寺に向けて歩いたときの八丁坂の厳しさが脳裏に焼き付いており、あの急坂を登ってもらうのは厳しいだろうと判断して、槇の谷経由の道に行くことにしました。距離は4キロ程長くなるものの、八丁坂を登るより緩やかな登りとなるのです。

その昔、この槇の谷の遍路道を、たくさんのお遍路さんに通ってもらいたいと、地元の人が道標を建てたりしたという話を聞いたのも、この遍路道を歩こうと思った理由です。それだけ、信心深い人が住んでいる道を通ってみたいと思ったのです。

とはいえ、実際に歩いて見る

と、そんな信心深い人たちの末裔は村を離れ、人の姿は皆無。日の出橋から入って一番奥まった槇の谷の集落は、廃校になった学校があり、向かい側には農協か役場か、はたまた森林組合の事務所にでも使われていたかのような建物が崩れかけていました。

民家はあっても人の気配はせず、玄関先に置かれたイノシシ捕獲用の檻が目立ちます。

そんな集落で異彩を放つのが、素鷲神社でした。集落に似つかわしくない程立派な神社でした。ソガ神社と読むのでしょうか。かつて栄えた林業やみかん栽培の栄華だけで建立された神社ではないと思わせるような、ソガという名前の響きです。

しかし、人も離れ、遍路たちも通らなくなれば、この神社も遍路道も荒れて行くのでしょうか。



日の出橋のたもとに立っていた道しるべです。



遭難しないように

荒廃間近の集落を過ぎて、不安が頭をよぎりました。この先の遍路道が通れなくなっていたらどうしよう、と。先日、中国万里の長城で遭難があったばかりだし…。

あの事故は、途中まで歩いていくうちに雪が多くなり、退避するにも下山する道がなく、前進してしまっただけで遭難したというものでした。

日本でも、秋にはキノコ採りに行って遭難したという新聞記事を目にします。

四国遍路で遭難したなんていったら、先達失格の烙印を押されてしまいます。今回は、万が一の時のために、GPS付きの地図をiPhoneに入れてきたし、大丈夫と言いきかせていました。

心配するまでもなく、遍路道は整備されていて、無事、八丁坂茶店跡の分岐にたどりつきました。一巡目では、ここから八丁坂の急坂を下って行ったのだと懐かしくもあり、ここまで来ればあと少しと、胸をなでおろしたのです。



【左上】雨に煙っているし、先を歩いているのは誰？

【左中】遍路道わきの巨木。何人も、何人もの遍路が通りすぎるのを見守ってきたのでしょう。

【上】八丁坂茶店跡にて。全員無事到着した記念写真。

【下左】八丁坂茶店跡に通じるピークにたどりつきました。ここまでが登りで、あとは尾根伝いの道と下りを残すだけです。

【下右】八丁坂茶店跡で休憩です。濡れているベンチでも、腰掛けられることがありがたいのです。



【左上】岩屋寺の行場を守るように立つ「お不動さん」です。

【上右】行場の途中で小休止。疲れ果ててうなだれている人もいます。

【右】あまり長く休んでいると体が冷えてしまうので、快速チームは先に小休止を切り上げて、歩きはじめました。

【右下】行場を下りきると、杉の根が網の目のように遍路道を覆っています。滑りやすいことこの上ありません。やっとなど一つ、と油断していると、写真の山桐さんのように転びそうになってしまいます。



行場を抜けて山門へ

八丁坂茶店跡を過ぎて少し行くと、遍路道は下り坂となります。下り始めたところから、岩屋寺の行場となり、行場に行く道と遍路道とが交錯して、どれが遍路道か分からなくなってしまいます。それでも、行場一番の難所まで来れば岩屋寺はすぐ下です。

しかし、この行場の坂は急でした。しかも雨で濡れた石や木の根の滑りやすいこと、大変だったと思います。急坂を下りながら思いました。一巡目では岩屋寺裏山のこの急坂を一気に登り、そして八丁坂という急坂を下りて行ったのですから、かなりきつかったと思います。そう思うと、今回の槇の

谷経由の遍路道は、楽な方だったのだと再確認することができました。

坂を下りきったら岩屋寺山門です。歩き遍路は境内の途中から脇に歩きはじめたり、あるいは建物の裏から境内に入ったりすることがありますが、ここの山門は遍路道に向けて建っています。いわば、歩き遍路専用の山門とでもいいでしょうか。

腹も減ったことだし、お参りが終わったら、お昼ご飯にしましょう。



バス停にご用心

岩屋寺からはバスに乗って久万高原まで戻り、久万高原で乗り換えて、三坂峠から松山に向けて一気に下ります。

岩屋寺からのバスは、伊予鉄南予バスで、久万高原からはJR四国バスです。なぜ田舎の路線バスで乗り換えなければならないのか、そんなにたくさんの路線があるようにも思えないのに。しかも、両路線とも岩屋寺とつくバス停があり、JR四国バスの方は岩屋寺口、伊予鉄南予バスは岩屋寺前というのです。岩屋寺口のバス停は4キロほど離れたところがあり、それを岩屋寺門前にあるバス停と間違えると大変なことになるのです。

久万行きバスに乗るのはてっきり私たちだけと置いていたら、私たちと同じようにバスを使って遍路をしている女性がいました。途中のバス停から、もう一人女性のお遍路さんが乗ってきました。この人は、岩屋寺から歩いて来て、二つ～三つ先のバス停で乗ったようでした。

私たちも天気がよければ、その女性のように少し先のバス停まで歩いてよかったのですが、誰も

バス待ちの間に、歩こうと言い出さなかった所を見ると、そんな気にはならなかったのでしょうか。

くだんの女性たちは、乗り換えたバスにも乗車していましたが、同じように三坂峠で降りて歩くのかと思ったら、そのままバスで行ってしまいました。おそらく、もう少し下った大久保坂か塩ヶ森のバス停まで行って、そこから歩くつもりなのでしょう。

三坂峠からの下りは、これが松山近郊なのだろうかと思うほどの溪谷沿いの道でした。標高700mから300mまで一気に下ると、あとは田園風景の中の舗装道路となります。

三坂峠からおおよそ2時間半で、46番浄瑠璃寺にたどりつくことができました。



【下】三坂峠から下り始めたら急に視界が開け、眼下に松山の街、その先に瀬戸内の海を一望にすることができました。ちょうど正面に松山空港の滑走路が見えています。



四十六番浄瑠璃寺

四十六番浄瑠璃寺の門前で。



「長珍屋」で宿坊を思う



2日目の宿は、四十六番浄瑠璃寺の真向かいにあります。荷物を置かせてもらってから、浄瑠璃寺をお参りました。

宿は、「長珍屋」という鉄筋コンクリート3階建ての大きな遍路宿です。ゆっくりながらもエレベーターもあり、雨で濡れた衣類を洗濯・乾燥させることもできます。料理も、ちょっとした旅館並みのものです。**【左下の写真】**不要になった荷物も宅急便で送ることができます。

こう考えると、やはり宿坊は敬遠されがちになるのも致し方ないのでしょうか。聞いたところによれば、宿坊が敬遠される一番

の理由は、朝のお勤めがあるからなのだそうです。

その反面、最近は宿坊流行りだと聞きます。インターネット上にも、宿坊を取り上げたホームページがあるほどです。そんな宿坊では、坐禅や写経をするという「行」が人気を集めています。畑の野菜を収穫して、精進料理を作るなんていうのもあります。

同じ宿坊とはいえ、四国遍路の宿坊は、ただの宿泊施設と化し、朝の勤行はじめ、「行」が敬遠されてしまいました。宿泊施設と勘違いされたのでは、設備面での見劣りは免れません。

宿坊は、「行」という仏道を体験する場所だという原点に立ち返って、活発になることを願わずにはられません。

満願の朝

塩月さんにとっては、いよいよ満願の朝を迎えました。

宿の前で、広渡さんに身支度を整えてもらい、まるで入学式の日を迎えた一年生のように見えます。

一方、さあ出発という時に、階段でよろけた雨海さんは、杖につかまり転ばずに済みました。塩月さんの年齢まで、まだかなりありますが、大丈夫でしょうか。



八坂寺

2日目の雨とは打って変わり、3日目は好天の中を出発。四十七番八坂寺には、まだ朝のさわやかさが残っていました。札所に一番乗りして、朝日を浴びた本堂の中でのお参りは心地よく、今日一日、このすがすがしい気持ちで過ごせますようにと願わずにはいら

れません。

振り返ると、八坂寺の庫裏は3階建てで、お城のような作りでした。すぐに、すがすがしい気持ちが打ち消された気がしたのは、私だけだったでしょうか。

そんな気持ちも打ち消して、さあ石手寺目指して歩こう。



文珠院と札始大師堂



八坂寺から西林寺に向かう田園の中の遍路道

■■■ 衛門三郎と四国遍路

伊予の国浮穴郡荏原に衛門三郎という欲深い長者が住んでいました。ある日、一人の旅の僧が托鉢にやってきました。欲深な衛門三郎は旅の僧を追い返そうとしましたが、動きませんでした。腹を立てた衛門三郎は、竹ぼうきでお坊さんの腕をたたき落としました。腕は八つに割れて飛び散ってしまいました。翌日から8日間に8人の子供達が次から次へと亡くなりました。

ある夜、衛門三郎の夢枕にあの旅の僧が現れ、「全非を悔いて情け深い人になれ」と告げます。夢から覚めた衛門三郎は、自分が強欲であったことを悔い、あの時の旅僧は弘法大師だと気が付きました。

衛門三郎は、弘法大師に許してもらおうと、四国を巡っている大師を捜して四国の道を東からまわったり、西からまわったりして歩きました。

これが四国遍路の始まりとされています。

歩き遍路ゆかりの場所

八坂寺から四十八番西林寺に向かう途中に、歩き遍路にゆかりの場所が二ヶ所ありました。

一つは「文珠院」という四国遍路開祖と言われる衛門三郎の屋敷跡に建てられたお寺で、二つ目は「札始大師堂」といい、衛門三郎【上の説明参照】が自分の住所と名前を記した札を始めて貼った大師堂とされています。

現在、お遍路さんが札所で納める納め札の始まりが、衛門三郎が住所と名前を書いて貼り、いつかお大師さんが巡ってきた時に見てもらい、罪滅ぼしをしていることを認めてもらうためのものだった

のです。

会えない相手に対して、罪滅ぼしをするということから、四国遍路は死者との邂逅の旅の意味も持ち始めたのではないのでしょうか。私も、愛媛出身の亡き父が、どこかにいるのではないという思いがあって、歩きはじめたのかもしれない。

四国八十八か所には、二十の別格霊場があり、文珠院は別格第九番の霊場になっています。ちなみに、前回立寄った十夜ヶ橋は、第八番霊場です。

【下左】四国別格第九番霊場文珠院。

【下右】札始大師堂にて。「お大師さまのお泊跡」という石碑が建っています。「圓福寺和尚のお休み所」という石碑は建たないでしょうねえ。



四十八番西林寺、四十九番浄土寺



【上】西林寺でのお参りの様子。

【左】西林寺山門。太鼓橋を渡って、石段を降りたところが境内です。この橋の手前右側に、臨濟宗妙心寺派のお寺を発見したので、ちょっとお参りしてきました。

次から次へ

重信川を渡って遍路道に入ると、正面に西林寺山門の屋根が見えてきます。用水路のような内川に架かる橋を渡って、石段を降りたところが西林寺の地面の高さです。余計な事ですが、重信川・内川の増水時に、水につからなかったのだろうか心配になってしまいました。水に縁のあるところらしく、すぐ近くに名水百選の「杖の淵」というきれいな湧水があり、立ち寄ってみました。

浄土寺正面の参道に出ると、

真っ正面に仁王門が見えてきます。こちらの門は、石垣が組まれた上に建っていますので、水の心配はなさそうです。

生まれた寺が山を背負っていたものですから、圓福寺といえ、平地にある寺はピンとこないのですが、浄土寺は後ろに山を背負っていて、落ち着きます。

どこからか太鼓の音が聞こえてきたので、山の方に登ってみました。どうやら隣の神社の太鼓だったようでした。



「本当においしいのかしら？」
と言いなうな石田さんです。

【下】浄土寺の仁王門。
【右】浄土寺でお参りを終えて、記念撮影。





繁多寺の山門



繁多寺境内にある鳥居

寺名と地名

繁多寺の境内に、立派な鳥居と、やはり立派な神社がありました。神仏習合のままなのでしょうか。どっちが母屋で、どっちがとられた方なのか、なんていう〇×式の考え方はよくないと、お寺の名前が教えてくれています。繁多ですから、いろんなものが繁栄したらいいじゃないかと。雑多でなくてよかった、なんて、失礼。雑多だったのは、私たちがコンビニで思い思いに選んだ、お昼ご飯でした。

2日目の岩屋寺での立ち食いの昼食とは打って変わり、今日のお昼はお日さまを浴びて、紅葉を愛でながらのピクニック気分でした。

ところで、お寺の名前の読み方

ですが、「はんたじ」と読むそうですが、お寺のあるあたりの地名は畑寺（はたでら）といいます。

江戸時代の澄禅という人の「四国遍路日記」には、「宿を出でて二十五町往きて畑寺の繁多寺に至る。」と書いてあるそうです。

もともと光明寺と言われていたものを、弘法大師が繁多寺と改称したといいます。識字率が低かったであろう昔のことを思うと、「はんたじ」と言ったものが口伝で「はたじ」に変わったのかもしれませんが、それが、土地の人たちの通称となって、地名にもなり、そこから字をおこして「畑寺」となったのかもしれないと、勝手に想像させていただきました。



繁多寺の境内でお昼をいただきました。



繁多寺を出発して、石手寺に向かう。

結願にあたり、「まんがん」の書を準備してきた塩月さん。「満願」を「萬願」と書いてしまい、思わず苦笑い。でも、まだまだたくさん願いがあることが、塩月さんの元気の秘訣だと思えます。「萬願」を持って、まだ四国を歩いてほしいんですよ。



結願

石手川にさしかかると、石手寺が正面の突き当たりに見えてきます。

塩月さんは、いよいよ結願を迎えます。まもなく傘寿を迎えるようですが、とてもその年齢に見えません。そして、ご存知のように、健脚です。

とはいえ、70過ぎてから歩き遍路に参加されての結願は、感慨もひとしおかと思えます。

初参加がこの石手寺からでした。寒い中を歩いて、仙遊寺宿坊で熱を出し、ストーブにあたっていました。次の日は、冷たい雨で、ときおりみぞれまで降るような日だったと覚えています。熱がある中、「大丈夫、大丈夫。」と言って、黙々と歩いていました。

冷たい雨の中、これ以上、風邪を引いている人を歩かせてはいけなないと、塩月さんのせいにして、今治湯ノ浦温泉に行って、温泉に入り、食事をして休憩。四国あるき遍路の後にも先にも、温泉に

入って昼ごはんを食べたのはこの回だけです。

これに味をしめて、また風邪を引いてくれないかなと思っていましたが、それ以来風邪も引かずに皆勤賞。今回、結願を迎えました。おめでとうございます。

石手寺本堂で、お参り。



一生懸命読経する塩月さんはじめ、みつわ台組



いつも納経帳係をありがとうございます。いつも後から一人でのお参り、申し訳ありません。



添歩員つき

日曜日の石手寺は混雑しているかと思いきや、山門前で集合写真が撮れるほどの人出でした。

それでも、入口の門から山門までの間に仲見世があったり、本堂に五色幕がはためていたり、華やかな感じがするのは、道後温泉が近い、観光地的な要素もあるからでしょうか。

それ以上に、いくつも峠を越えて今回打ち止めの札所に着いたこと、昨日の雨も上がり、良い天気であること、ここで満願を迎える仲間がいることなど、歩き遍路でなければ得られない達成感があるから、余計華やかな感じがするに違いありません。

梁川さんが納経帳をもらいに行くと、駐車料金を請求されたそうです。こんな団体ならバスに違い

ないと思ったのでしょうか。遍路宿でも、添乗員さんと運転手さんのお部屋はどうでしょうか?とよく聞かれます。こんな団体の歩き遍路は、まずあり得ないのです。今度、添乗員さんは?と聞かれたら、乗ってはいないので、「私が添歩員です。」と答えて見ようかな。

それにしても、お参りの人に自動車の駐車料金を請求するなんて、やはり観光地なんですね。



隠れ難所

石手寺をお参りしたら、もう終わった気になっていたでしょう。後は道後に行って温泉にでも入ろうかと思っていたでしょう。ところがどっこい、遍路道は修行させてくれるのです。

石手寺本堂の左から山の中に石段が伸びていて、これが道後に抜ける遍路道なのです。右の写真を見て分かる通り、あの華やかな境内の雰囲気と違って、深山の中の遍路道といった感じです。もう厳しいところはないだろうと思っていた人には、隠れ難所といってもいいかもしれません。

遍路道を歩いていくと神社にたどりつくことがよくありますが、ここも道後温泉にある伊佐爾波神社の裏に出ます。ちょうど七五三のお参りをしていたようです。

伊佐爾波神社の玉石でできた石段を下ると、温泉街です。今回の締めくくりは、道後温泉本館で入浴して旅の疲れを癒すことでした。

名だたる温泉だけあって、ここから空港リムジンが出ていますので、楽に帰路に着くことができました。

お疲れ様でした。



【上・中】石手寺から道後温泉に向かう遍路道。石手寺境内の華やかな雰囲気と違い、山中の遍路道といった感じです。

【左】道後温泉本館の前で。





写真：石川 信子
 広渡 寛行
 梁川 律子
 宮田 宗格
記録：佐藤 忠三
文： 宮田 宗格
編集：宮田 宗格

臨済宗妙心寺派 圓福寺

263-0025

千葉市稲毛区穴川町375

電話 043(251)9181

FAX 043(251)9549

<http://www.chiba-enpukuji.com>

Email: oshou@chiba-enpukuji.com

編集後記

わらじのひもで擦れた足も、ようやく癒えてきました。かさぶたが取れないうちにとがんばって編集をいたしました。

名カメラマンが増えて、写真を選ぶのに苦労しましたが、なんとかできあがりました。

9ページの「あしあと」の時間は、佐藤忠三さんの詳細な記録から拾わせていただきました。多少の時間差は、早く歩いた人とゆっくりの人の違いだと思ってください。

初参加の田中さんと、満願を迎えた塩月さんの感想文は、寺報の掲載いたしますので、併せてお読みいただければ幸いです。

第11回は、平成25年2月22日から24日の二泊三日を予定しております。今治周辺を歩いて、最後は横峰寺まで歩く予定です。どうぞご期待の上、みなさんのご参加をお待ちしております。

なお、参加される方は早めにお申し込みください。申込が遅れますと、割引航空券の値段が変わるため、参加費があがる場合がありますので・・・。

つたない写真集を最後までご覧いただき、ありがとうございました。また、次回お会いしましょう。



2巡目第10回
平成24年
11月16日～18日